

スペイン・バリャドリッド大学

交換留学報告書



(左から、アルカサル、大聖堂、アクエドクト)

私は 2024 年 9 月から 2025 年 2 月までの約 6 か月間、大学の交換留学制度を利用して、スペインにあるバリャドリッド大学で学んだ。私はセゴビアという歴史的で趣のある町にあるキャンパスに派遣され、所属していたのは「社会科学・法学・コミュニケーション学部」で、観光学に関する科目を中心に受講した。今回の報告では、留学先での学習環境や生活の様子を振り返りながら紹介していきたい。

セゴビアでの生活は、まるで遺跡の中に住んでいるような気分だった。アクエドクトからアルカサルまでの観光通りはいつも賑わっているが、少しその道を避けるだけで、美しい自然と魅力的な小道を見つけることができる。中心地は、信号と自転車がほとんどみられない。みんな犬の散歩や買い物、友人と話ながら歩くのを楽しんでいる長閑な場所であった。ちなみにあのアルカサルまで一切人に会わずに行くルートも存在する。散歩に出かけ、不意にこの道を見つけた時は、観光通りの人混みを思い出し、歓喜であった。

バリャドリッド大学のセゴビアキャンパスでは、様々な授業を選択できるが、主に観光学を勉強する。私が履修したのは、観光地理学と観光文化資源学であった。前者では、観光学の基礎ともいえる、マップの見方や観光客やトレンドについての表の作り方から始まり、スペインの各まとまりにおける地理的特徴、行政単位まで幅広く学習できる。特に行政単位について、日本と大きな差があり、新鮮で興味深い知識が得られた。この授業では、フィールドワークとして、ワイナリーへの見学にも行かせていただいた。後者は、知識と実践というコンセプトに明確に分かれており、どちらも違う先生に教えていただいた。知識の授業では、観光資源の分類や保存についてだけでなく、古代ギリシャ、ローマ時代の遺跡や建造物について学んだ。実践では、セゴビアの遺産や各国の無形文化遺産について発表があり、教室ではなく、実際に現地に行って外で発表を行った。先生と生徒の距離の近さ、フィールドワークや発表中心の授業に刺激を受けた。卒業論文に必要な知識だけでなく、様々な学問に着目し、その利用方法について学ぶことができた。

留学を振り返り、スペイン語力が上がったなと感じたのは、寝る前に会話練習をすることである。言語学習はやはり難しく、一人でやろうと思うとなおさらであった。様々な YouTube やブログを見て、自分で試したり、と試行錯誤した。自分の中で一番効果があったのは、寝る前に

頭の中でスペイン語を話すという方法である。これは、大学の国際学生寮に住んでいたときに、留学生から教えてもらった学習方法である。留学前に1年間国際学生寮で過ごした時間が有意義なものだった。留学生としての振る舞いなどを間近に、自分事として、一緒に体験できた。

スペイン留学での思い出を振り返ると、実に様々な事があった。しかし、そのお陰で、成長と人とのつながりが生まれたと思う。思い出としては、友人の1人が一週間の休みを機に遊びにおいでと言ってくれ、お邪魔することになった事があった。(最初は、どのくらい居ていいの?と聞いたとき、好きなだけと言われ、日本のお泊りの感覚で、2.3日だと思い、全く荷物を持っていかなかったら、何やってるの!と友人に怒られ、家中の服と必需品をかつさらいに家に戻ることになった。) 彼女の家は、ペドラハスという村にあり、そこでは、友人が朝遅くに起きてくるまで、彼女のお母さんといっしょに食事をして、お昼は起きてきた友人と遊びに行き、夜にはお父さんがサラマンカやメディナデルカンポ等の近くの街に連れて行ってくれた。スペイン語を勉強としてではなく、楽しみとして感じる事ができた。私の誕生日には、別の友人がバリャドリッドで誕生会を開催してくれた。多くの同級生と留学生を呼んで、パーティーをして、その後はその子のもう一つの家に泊めてくれた。みんな夜中までとても元気で、深夜までダンスしていた。

同じ学部の留学生は、3人だけで、アルバ、フランス、オランダからの留学生だった。イメージでは、留学生は英語で話すに勝手に思っていたが、話すときはいつもスペイン語だった。しかし、彼女らは、一番大切な理解者であり、話し相手であった。スペイン語やスペイン人について気づいたことを話したり、自分たちの文化について話し合ったりして、文化交流を行うことがとても楽しい時間だった。それをスペイン語を介して行う事ができたのが、スペイン語を勉強して良かったと感じた瞬間であり、モチベーションになった。

旅行では、スペイン各地を巡り、バルセロナ、グラナダ、セビーリャ、コルドバ、トレド、バリャドリッド、マドリッド、また、授業で勉強したカナリアス諸島にも行く事ができた。

(スペインの空はいつも美しい)



スペイン留学は、確実に私の中で一番の、人生を変える体験であった。何も知らなかったスペインという地は、帰りたい場所になり、新たな夢を与えてくれた。セゴビアは小さな街だったが、つながりは強い場所である。そんな温かいセゴビアの地に感謝を。そして、留学を支えてくださった先生方、派遣先のバリャドリード大学の関係者様、国際学生寮時代からお世話になっている国際交流室の皆様、いつも相談に乗ってくれた家族と友人たち。このすべての人々のお陰で、夢のような体験が実現できました。本当にありがとうございます。これからは、その体験を、喜びを還元していきたいと思います。

バリャドリード大学バリャドリードキャンパス 交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部 国際関係学科
国際公共政策プログラム 4 年

2025年2月から7月までの半年間、バリャドリード大学バリャドリードキャンパスに交換留学した。バリャドリードはマドリードの北に位置し、電車で2時間、バスで3時間ほどかかる人口30万人ほどの都市だ。訛りの少なく、標準的なスペイン語を話すことでも知られる。

バリャドリード大学バリャドリードキャンパスは法学、経済学、医学、化学など多くの学部を有しており、市内にそれぞれのキャンパスが点在している。私はその中で、商学部国際関係学専

攻に在籍した。国際関係学専攻では政治学、法学、統計学、日本語、中国語など様々な授業が開講されており、その中で私は比較政治学の授業を履修した。授業は月曜と金曜の週2回2時間行われ、月曜日は毎回の課題にクラスメイトとともに取り組み、金曜日は講義形式の授業で比較政治の理論を学ぶ。授業はスペイン人とともにスペイン語で受講するため非常に難易度が高く、授業に行きたくないと思うことは何度もあったが、予習復習に取り組む、クラスメイトに手助けを求める、わからないことは先生に聞くなど授業内容についていけるよう努力した。

また商学部には主に留学生向けの英語で行われるコースもあり、そちらの授業も2つ履修した。1つは消費者行動論、もう1つは極東文化研究への新しい西洋的アプローチだ。消費者行動論の授業も週2回2時間行われ、毎授業ごとにグループワークと課題があり、この授業はヨーロッパからの留学生が多かったのだが、彼らは英語が非常に流暢で会話に参加するのが難しく、そもそもクラスメイトが何を言っているのかわからない時もあった。また、経営学、経済学的なアプローチというより、心理学、社会学アプローチが多く、いままで勉強したことのない分野であったため授業内容の理解には苦労した。しかし、世界各国の留学生とのグループワークを通して、各国の文化の違いに多く触れ、学びの多い授業でもあった。極東文化の授業は日本、中国、韓国についてそれぞれ詳しく学ぶ授業であり、授業中に先生から「日本ではどうなの？」と質問を受けることが多々あり、日本の文化を紹介することが出来た。また、語学学校で留学生向けのスペイン語の授業を受講した。はじめは他のクラスメイトと比べ、自分のスペイン語のレベルが低く、うんざりすることがあったが少しずつスペイン語を磨き最後のプレゼンでは「クラスで一番のプレゼンだった」と多くのクラスメイトが言ってくれた。

留学中、スペイン人、イタリア人と3人でルームシェアをして暮らしていた。特にスペイン人のルームメイトは日本のアニメやゲーム、音楽がとても好きで話が合い良き友人となってくれた。なにより彼は英語が全く話せず、スペイン語を話す機会を非常に多く提供してくれた。他人と一緒に生活するシェアハウスは不便さを感じるが多々あったが、異国の地でいざという時に助けてくれる人がいるというのは非常に心強い。風邪をひいたときは持っていた薬を分けてくれ、スペイン全土で停電が起こったときは役立つ情報を共有してくれた。



大学では忍術サークルに所属した。参加する前はてっきり忍者のまねごとをするお遊びサークルかと思っていたが、実際には日本式武術を真剣に学ぶサークルであった。2時間みっちり練習し、生徒たちも真剣で終わったころにはいつもへろへろになっていた。なにより驚くべきは先生方で何十年も忍術に費やしてきた方々で、片手で腕立て伏せをし、目にもとまらぬ速さで技を繰

り出すなど非常に失礼ながら化け物じみた方々であった。この忍術サークルで多くのスペイン人と知り合い、親交を深め最終的に発表会に出場し技を披露した。彼らとの交流はスペイン語の勉強にもなり、週 2 回体を動かすことで健康的、精神的にも安定して過ごせ、なにより楽しかった。また日本の格闘ゲームサークルに所属し日本のアニメ、ゲームを通じて多くの友人ができ、スペイン語、スペインの文化を教えてくれた。非常に充実した留学になったのは間違いなく彼らのおかげである。

出発前、留学経験者の先輩方が異口同音におっしゃっていたのが「留学中何度もつらい思いをするが、帰国時には行ってよかったと心の底から思うようになる。」ということだ。留学にかかる様々な準備に多大な労力と時間を費やし、疲弊していた自分はこの言葉を信じ切れずにいた。しかし留学を終えた今、自分も先輩方のように行ってよかったと思う。これから留学に向かう後輩も、留学準備に苦しむことになるだろうが頑張ってもらいたい。

最後に、留学にあたりご尽力いただいた森先生、佐藤先生、多くの先生方、国際交流室の皆様、滞在中お世話になったバリアドリード大学の先生方、スペインの友人達、留学を応援してくれた両親、友人、先輩など多くの方々、そして、留学してよかったと思える日々を過ごさせてくれた友人 I 氏に心より感謝申し上げます。

スペイン・バリャドリード大学

交換留学報告書

静岡県立大学

国際関係学部国際言語文化学科 4 年

私は、2025 年 2 月から 2025 年 7 月までの約半年間、スペインのバリャドリード大学に交換留学をした。静岡県立大学から留学できるのは、セゴビアキャンパスとバリャドリードキャンパスの 2 つがあるが、私はバリャドリードキャンパスの商学部で勉強していた。大学では文化経済、東アジアの文化、比較政治学についての授業の 3 つを履修していた。また、大学付属の語学学校に通いスペイン語のコースを受講していた。

授業は留学生向けの英語で行われるものと、現地の学生とともに受講するスペイン語で行われるものがあった。私は英語の授業を 2 つ（文化経済、東アジアの文化）、スペイン語の授業を 1 つ（比較政治学）受講した。英語で行われる授業の方では、言語は理解することができる一方、授業内容についての知識がないとついていけないと感じる場面があった。特に文化経済に関しての授業では、経済学の専門用語や数字、グラフを使つての分析をするため、静岡県立大学で国際言語文化学科に所属している私にとっては理解するのに時間がかかった。また、スペイン語で行われた比較政治学の授業ではグループワークが多く、現地の生徒と上手くコミュニケーションがとれず苦勞した。しかし、生徒や先生も協力的な人が多いため、授業後に質問をしに行くことで疑問を解消していった。また、最後の筆記試験は先生方の配慮によって私は英語で受けることができたためなんとか単位を取得することができた。

語学学校は商学部から歩いて 15 分ほどのところにあり、1 コマ 2 時間の授業が週に 2 日あった。事前にウェブ上で行われる試験によってクラス分けがされ、私は B2 のクラスに所属していたが、同じレベルでもクラスメイトのレベルが高く授業についていくのが難しかった。テストは筆記とスピーキングがあり、最後にはそれぞれのスペイン滞在について発表するプレゼンテーションがあった。

次に生活面についてだが、私は商学部から徒歩 10 分ほどの場所にあるアパートに他の留学生 3 人と共同生活をしていて、大学の寮に入居することもできるが、アパートのほうが家賃が安くすむためシェアアパートを選択した。私はイタリア人、チェコ人、スロバキア人と暮らし、時に文化的な違いによるストレスを感じることもあったものの、徐々に慣れていき話し合うことで解決していった。

また、週末や休暇中にはスペイン国内や国外へ旅行をした。国内では、バリャドリードから比較的近いトレドやセゴビア、マドリッド、サラマンカなどへ行き、遠い都市だとスペイン南部に位置するグラナダやカナリア諸島のランサローテへ赴いた。国外に関しては、フランス、ベルギー、ギリシャ、ポルトガルへ行った。特にポルトガルはスペインの隣に位置しているため、多くの留学生が旅行へ行く。どの街、国も美しく、思い出に残る体験となった。

スペインでは、外出や夕食の時間が日本よりもかなり遅い。日本の規則正しい生活に慣れていて私にとって、当初はその文化に戸惑いを感じた。日本では夕食は 20 時頃までに済ませ、早めに就寝する生活が当たり前であったが、スペインでは 22 時を過ぎてから夕食を取ることも珍しくなく、夜遅くまで街に人があふれていることに驚かされた。しかし、現地の時間の流れや過ごし方に触れる中で、それが自然と自分の中にも馴染んでいった。文化的な違いに適応することは簡単ではなかったが、それを受け入れようとする中で、自分自身の柔軟性や視野の広がりにつながったと感じている。

この留学を通して、語学力だけではなく、異なる文化の中で生活し、自ら判断して行動すると

いう経験を重ねるなかで、自立心や柔軟性といった精神的な面でも大きく成長できたと感じている。もし留学に行くべきか迷っている方がいたら、ぜひ勇気を出してチャレンジしてみてほしい。このかけがえのない経験を、今後の学びや人生にしっかりと活かし、さらに精進していきたいと思う。

最後に、この留学を実現させてくださった森先生をはじめ、国際交流室の皆さま、また、JASSO 海外留学支援制度、バリアドリード大学の関係者の皆さま、そして留学を許可し送り出してくれた家族に、心より感謝申し上げたい。

